

学』附録一四三頁)「三心即一心々々即三心」(『隆全』二、四一頁)として回向発願心の解釈に出る。

すなわち行者の心を真実の願に回向すれば疑心あることなく疑心なければこれが深心であり、この深信の中に決定往生の想いを起こせばこれが回向発願心であると言う。『散善義問答』の別の段(『隆全』二、一八九頁)には回向発願することは至誠心が起こるからであるとしてあり、三心が別々に存在することを否定している。

隆寛は『捨子問答』(『続浄』九、一九頁)では本善の回向・本願の回向・往生の回向・還相の回向、『散善義問答』(『隆全』二、三九〇四二頁)では本善の回向・本願の回向・還相の回向と回向発願心を分類しているが、この分類において前述の三心即一心を説明する回向発願心を本願の回向と名付け、それを最も本となし正となすべきものであるとしている。ここでも本願の三心ということを中心に解釈が進められているのである。

#### 第六項 散心・妄念の念仏

漢語体の著作には直接的には出てこないが和語体ではしばしば散心・妄念という言葉が現れ、隆寛の一つの大きな解決すべきテーマであったことがうかがわれる。すなわちこの問題を扱うことで、人間の限界を踏まえた他力重視の考え方が明確になってくるのである。

法然の散心の念仏に関する法語はわずかであり、散心と三心の関係が明確とは言いがたい。その点で隆寛は和語で多くの言葉を残しているので、次に整理してみたい。

散心の念仏の定義は『閑亭後世物語』巻上〔続浄〕九、四三下～四頁上〕に定心の念仏とともにある。定心の念仏とは、

心のちり乱るをとどめて。仏の相好光明に思をかけて申すを

言い、散心の念仏とは、

心の妄念の沙汰もせず。仏の相好をも思はず。只舌を動して名号を唱ふる

のを言い、この散心の念仏こそ本願の念仏であると続けるのである。ここで法然の言葉を引き、決して定心で申す念仏が勝<sup>すぐ</sup>れているわけではなく、法然はただ「本願のむなしからず。称念せば必ず生まるべしと思ふより外には、全く心にかかる事なし」と述べていると言い、また善導は「称名は易きが故に相続して即ち生まる」と釈していると言い、散心多念相続の念仏を強調している。

次に散心の念仏がなぜ本願の念仏となるかについて『捨子問答』巻上〔続浄〕九、七上～

八頁上)に「弥陀ノ本願ハ。正ク是レ凡夫ノ為」であり、今時の凡夫は三業は不善で、六根は貪瞋とんじんであり、煩惱に悩まされ妄念を止めることはできない存在であると位置付け、阿弥陀仏はこのような凡夫のために「他力ノ名号ノ願ヲ発シ給ヘリ」と言うのである。もし三業を整え、妄念をとどめて内外相应して勤めることができるとし、「是ニ叶ヌ鈍根無智ノ者ナレバコソ。弥陀の他力ニスガリテ。浄土往生セントハ打憑ミ奉レ」と言う。

たとえ心が澄まなくても、仏が修行して成就した本願の名号の功德を利他真実の功德と心得てねんごろに称えれば、濁り水が澄むようにその行も清浄真実の業となり、疑いなく往生すべきことを思うべきであるとする。これを「真実心ヲ具足シ。他力ニ乗ジタル行者」と定義している。

ここに煩惱、妄念に覆われた凡夫の三心具足の念仏による救済の思想が見て取れるのである。すなわち凡夫救済こそが弥陀の本願であると信じ、その他力にすがって疑いなく(深心)往生を願う(回向発願心)と三心を積すのである。ただし、ここで至誠心の解釈について隆寛独自の姿勢が表れていることに注意しなければならない。これについては次の項で触れることにしたい。

また『自力他力事』(『続浄』九、三一―二頁)には妄念はとどまるところを知らないがひとえに弥陀の誓いを憑み仰ぎ怠らない念仏を他力の念仏と言ひ、自力では往生できないと思ひ余行をまじえず一向に念仏するのを他力の行と言うとあり、

釈迦如来ネンゴロニス、メオハシマシタルコトヲ。フカクタノミテ二心ナク念仏  
スルヲバ。他力ノ行者トマフスナリ

と言う。

隆寛は散心の念仏についても一つ『捨子問答』卷下〔続浄〕九、一七頁〕においてその  
解決策を示している。ひたすらに念仏ばかりを相続していることができない人のために善導  
は四種の助業を示したのであるとし、また助業だけでなく余行も一向専念のためと思つてす  
れば雑行とはならないと言うのである。ここでは「称名ノ行ヲ家主トシテ弥陀二心ヲ係ケ奉  
ン」と間断なく阿弥陀仏を思うことが強調されている。

隆寛は凡夫であるから妄念が起り心が散るのは当然であると言う立場から弥陀の他力に  
憑み常に阿弥陀仏を思い念仏することが大切であり、他力に帰する心に三心が具わるとい  
う論理構成をしているのである。

#### 第七項 他力と至誠心

前に問題となった他力と至誠心の関係について、隆寛の考えをまとめてみたい。また、こ  
のことが隆寛の他力を考えるうえで最も核となる部分であると考えられるのである。